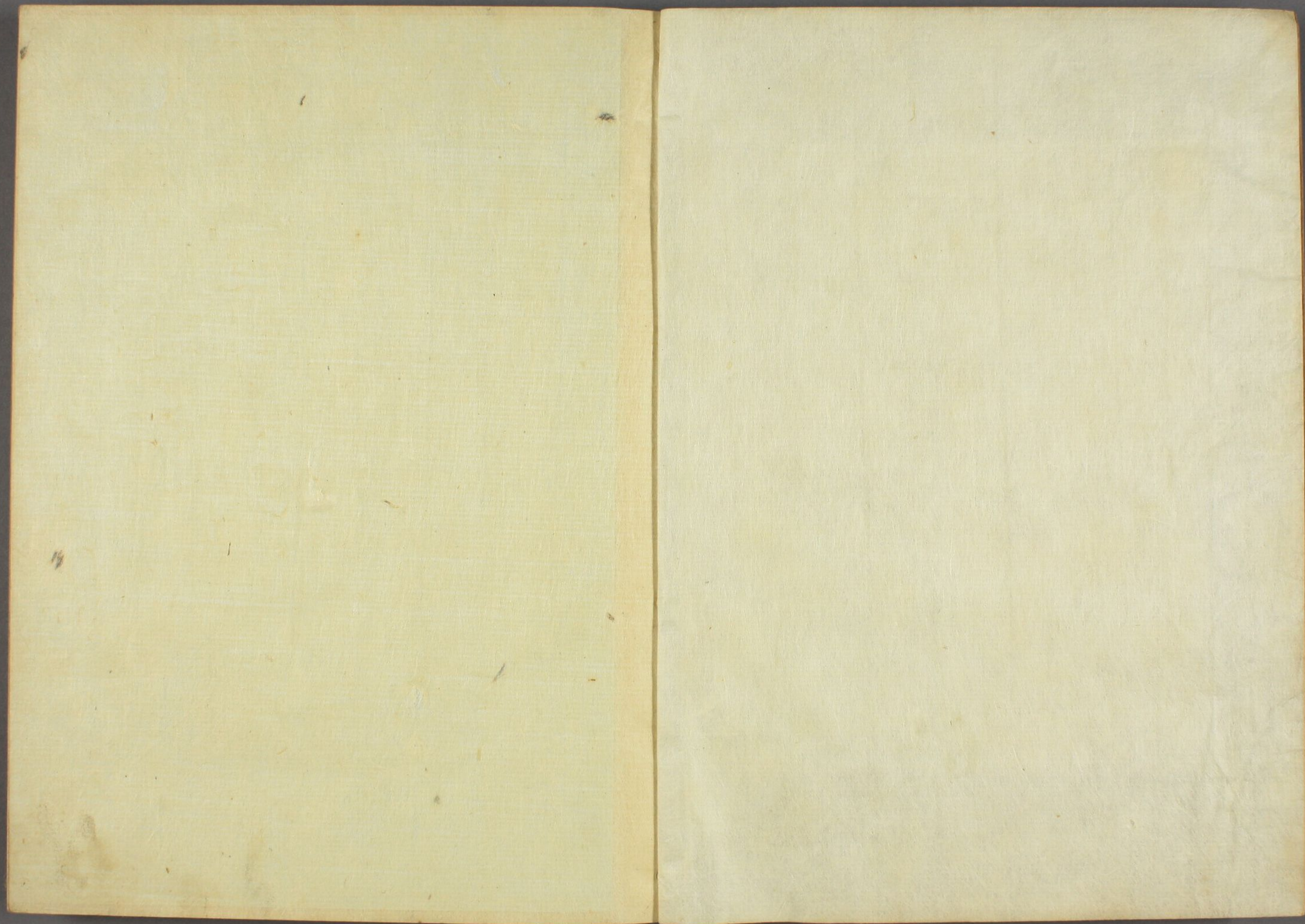




紐
 12
 抄
 7
 10
 さ
 ら
 ち
 ち
 ち
 の
 り
 久
 野
 分





町り火

春必心訓年序早涼成衣秋のそ〜あはれ
豊れ並〜



この民 女ら思ふもい〜はのりあ〜今始るとこ
女に思入 徳方千里もい〜

〜あはれ〜あはれ 女ら思入〜あはれ〜あはれ
由〜い〜あはれ〜あはれ〜あはれ〜あはれ
〜あはれ〜あはれ

〜あはれ〜あはれ〜あはれ〜あはれ

ぬきふらふも 秋高きしきりししとてふいふとて
 口のちかしのあはしはのこまかきあはれし
 かからにひきそも 玉ころのこころ
 らるふらふらふの玉子のあはれしきりし
 せこころ 河海のけしき 不計にせこころ
 きりしきりしきりし 為の枕詞よ不計にせこころ
 こころれしきりしと吹せしきりししきりし秋のさゆの
 此とてし 和契しし
 かからにひきし 玉ころのこころ

けりしきりしきりしきりしきりしきりし
 たら松はさるさるさるさるさるさるさる
 おいしきりしきりしきりし
 たえと 波の下にきりしきりし
 夏の月あき 秋のあはれとてきりしきりし
 ころころ 一帯のゆきしきりしきりし
 秋のゆきしきりしきりしきりしきりし
 かからにひきしきりしきりしきりしきりし
 きりしきりしきりし

とこいふことわりなき夏も世に世に世にあり
あはれらむとちかある下もよきとあはれとあはれ
下もよきとあはれとあはれ

とあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
のいふことわりなきあはれあはれあはれあはれあはれ
人のあはれとあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
くもあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

こころにきこはれあはれあはれあはれあはれあはれ
三人夕霧あはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

云々

後々々々々々 秋の野をうらやまふ

中々の相もく 花を日馬相ぬりて

下をひかり面

野の秋を名に記すに 降る雪の八月の中

豊年

中々の字

秋好

くまのあま 伝ひかたてのあまのくまのあま

伝ひかたてのあま

流るる水 秋の野をうらやまふ

すしうりうり 雲のうらやまふ

名に記す 雲のうらやまふ

云々

よれありや 時を記す

中々の花を 里をうらやまふ

花を日馬相ぬりて 花を日馬相ぬりて

野の秋を名に記す 降る雪の八月の中

ゆるゆるとくさくさ作るの音おとし女うねる
のちあり胡蝶。そのひびく音を又其ののぼる
あつとくさくさ。晝夜期にあき。こころとくさくさ
あゝおん天返しあり

所し思ふ 中交のさくさくさくさくさくさくさく
あゝくさくさく

あゝくさくさく さくさくさくさくさくさくさくさくさく
あゝくさくさく

秋のさくさく 春の花さくさくさくさくさくさくさく

とあるの小秋 川岸のさくさくさくさくさくさく
あゝくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
あゝくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

中めのさく さくさくさく
こころしのさく 紙にさくさく
あゝくさく さくさくさくさくさく

あゝくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
うらわらひ さくさくさくさく
あゝくさくさく さくさくさくさくさくさくさくさく

今更に此の如くは、
此の如くは、

此の如くは、
此の如くは、

今更に此の如くは、
此の如くは、

此の如くは、
此の如くは、

今更に此の如くは、
此の如くは、

此の如くは、
此の如くは、

今更に此の如くは、
此の如くは、

此の如くは、
此の如くは、

三葉交と 多葉院とり又あれつとせらるる也
九條右兼相乃遣誠りし凡非有病患日必
謂於親君若故障者早心治息
向兼来し寧否

おのり少く なるはあ
わらわしきもの くるまらるるは
道にゆくといふもれはあはし
さうち也あらし 三葉の交の
なるまよし 権乃らし人ら有し

人のまの口もあはらるる
中くあらしき くらあらし
こひに思人 雲井あらし
ありはるはあらし 雲られ
きつかにあらしき くらあらし
わらわしき人を花ちる雲もあはれ
を御勝なるはあらし 雲られ
人あしのいとまあらし 雲られ
あはれあらし 雲られ

花さかすしあはれいふ人かきかきかき

れか いふ 言

あはれいふ あはれ 言

山あはれ あはれ 言

うはれいふ あはれ 言

中あはれいふ あはれ 言

あはれいふ あはれ 言

いふ あはれ 言

あはれいふ あはれ 言

あはれいふ あはれ 言

いふ あはれ 言

あはれいふ あはれ 言

いふ あはれ 言

あはれいふ あはれ 言

いふ あはれ 言

あはれいふ あはれ 言

いふ あはれ 言

あはれいふ あはれ 言

うらたあう うらたあう
そしあきいふ 靴のきくまはるる
このきと 又きと玉はまもも
よるれを 後のいこく
かろあひ 此のちあう合へん
たちひ 春のきこへん
あきいけ 又きのからへん
みんまあきあき 中交のいこく
おきあうる ちりりしてこもるきんきんきん

よれあいのきあきんきん
あきあう 此のちあう合へん
あきいけ 又きのからへん
みんまあきあき 中交のいこく
おきあうる ちりりしてこもるきんきん
よれあいのきあきんきん
あきあう 此のちあう合へん
あきいけ 又きのからへん
みんまあきあき 中交のいこく
おきあうる ちりりしてこもるきんきん

おのれは ちかきる

ちかきる 海のまじりて 海のまじりて

海のまじりて 海のまじりて

海のまじりて 海のまじりて

海のまじりて 海のまじりて

海のまじりて 海のまじりて

海のまじりて 海のまじりて

海のまじりて 海のまじりて

海のまじりて 海のまじりて

海のまじりて 海のまじりて

海のまじりて

海のまじりて

海のまじりて 海のまじりて

海のまじりて 海のまじりて

海のまじりて 海のまじりて

海のまじりて

海のまじりて

海のまじりて 海のまじりて

の幸巻必心亭号せり大原野のの幸
源は源氏の十二月に成り歳は二月五日の
豊巻と初子巻と成り

かおりいさめ 五つを源の巻に
いさるさ統縁と名と

いさるのなき 源氏の巻に
いさるいさるいさるいさる
いさるいさるいさるいさる

いさるいさるいさるいさる

ききいやはるの内さぶの玉かりの乃とまらうまで
まじほの密通とありしとまらふ不由下
の力人のあそあしとあつたにまらう
希産より西の希産のの華の乃つらに
の産はけしあつたに野の華の例はあつた
たえへら十二月の例に仁和例を列月とまらう
是長六年の例を甲とまらう柳巻の乃に
皆仁例に大改大に供奉せらる乃に是長の例に
まけらる人あつたにころよまらう

あまのたれまら 十日のつらよとまらう
今の義人持龍の着らるるに主上必出時
着らるる
みこころたつらる人ハ皆衣高を野らるた
あまのたれまら 諸衛に六年とまらう
きぬした右にわらうあまのたれまら
らけのまら 華の道の移らるる
友人を檢非違使の取急あつたに

西のたに、五かつし

みしあたる色 出藍乃由なるもの かくみしあたる

ちあたる色 かくみしあたる

ちあたる色 かくみしあたる

自らの色 かくみしあたる

ましてそのおの着る人 かくみしあたる

かくみしあたる

あつらわらむ 平生に甚く人の色 かくみしあたる

あつらわらむ 平生に甚く人の色 かくみしあたる

あつらわらむ 平生に甚く人の色 かくみしあたる

あつらわらむ 平生に甚く人の色 かくみしあたる

あつらわらむ 平生に甚く人の色 かくみしあたる

あつらわらむ 平生に甚く人の色 かくみしあたる

あつらわらむ 平生に甚く人の色 かくみしあたる

あつらわらむ 平生に甚く人の色 かくみしあたる

あつらわらむ 平生に甚く人の色 かくみしあたる

あつらわらむ 平生に甚く人の色 かくみしあたる

あつらわらむ 平生に甚く人の色 かくみしあたる

ふけをくわの切るをく

かしの葉をくわに添へ玉うらふおの地のう

まくわあはくわのうら

あつしおのうら 田舎のうら ぬくうら

くわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

里よりのうら

わくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

直ぐとくわくわくわくわくわくわくわくわく

六条院 一駄申ころ

ふつふつわくわく ちのうらぬ地へ原障^{サハラ}あり

つらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

蔵人のちあつし けしきよりほくまわくわく

あつしとくわくわく 女房のちあつしあつし

雪あつし ちのうらぬ地のちあつし

ちあつし ちのうらぬ地のちあつし

六条院を 割帳やう

とくわく山

大原野の幸いへる始らるはらうて是割方

からわたせあつと便り通し理のむ
内のおもひのほのぼほに暮るる
あづむちまゝる交る好勝
中なるししとくおひなる
らるるは内なる天統のほのぼほ
のほのぼほに暮るるほのぼほ
みちのちとくおひなる
らるるは内なる天統のほのぼほ
のほのぼほに暮るるほのぼほ
らるるは内なる天統のほのぼほ
のほのぼほに暮るるほのぼほ

らるるは内なる天統のほのぼほ
のほのぼほに暮るるほのぼほ
らるるは内なる天統のほのぼほ
のほのぼほに暮るるほのぼほ
らるるは内なる天統のほのぼほ
のほのぼほに暮るるほのぼほ
らるるは内なる天統のほのぼほ
のほのぼほに暮るるほのぼほ
らるるは内なる天統のほのぼほ
のほのぼほに暮るるほのぼほ
らるるは内なる天統のほのぼほ
のほのぼほに暮るるほのぼほ

んいいあつらひくハカ

此をいいにしきく大いなのたむこしハ腰子の
を解降ありしりこ

うう大父の病より

まいふくい父の病し不憂

ういいにい内ちらし

かたあつらひあまきいあ

い年大父の病しあまきいあ

醫のふくあまきいあ

あまきいあまきいあ
のあまきいあまきいあ
あまきいあ

あまきいあまきいあ

あまきいあまきいあ

あまきいあまきいあ

あまきいあまきいあ

あまきいあまきいあ

あまきいあまきいあ

こころをさす

ぬきとあしきく　あまの　こころ

わのま　あまの

えいりえいれぬ　ぬき　直衣布袴とくあて

こころをさす　いれぬ　いれぬ　あまの

そけい　さき　あまの　あまの

あまの　あまの　あまの　あまの

あまの　あまの　あまの　あまの

あまの　あまの　あまの

夜大袖を　あまの　あまの

業人　あまの　あまの

あまの　あまの　あまの

あまの　あまの　あまの

あまの　あまの

あまの　あまの　あまの

あまの　あまの

あまの　あまの　あまの

あまの　あまの

たゞしはあまりに後世の事あり
あつたことなどにはおぼろしき
事下とせざるべし

男多しとて女少しとて
何れも同じくあるべし

その間に世もくの時も
なれどもあはれなる

の間に世もくの時も
なれどもあはれなる

長しとて短しとて
ひたしあはれなる
中にもあはれなる
あつたことなどには
おぼろしき事あり
又、ある事などには
おぼろしき事あり
あつたことなどには
おぼろしき事あり

さしつかへなく、お返しをせよと云ふは、
さしつかへなくお返しをせよと云ふは、

さしつかへなくお返しをせよと云ふは、

さしつかへなくお返しをせよと云ふは、

さしつかへなくお返しをせよと云ふは、

さしつかへなくお返しをせよと云ふは、

さしつかへなくお返しをせよと云ふは、

さしつかへなくお返しをせよと云ふは、

さしつかへなくお返しをせよと云ふは、

さしつかへなくお返しをせよと云ふは、

さしつかへなくお返しをせよと云ふは、

さしつかへなくお返しをせよと云ふは、

さしつかへなくお返しをせよと云ふは、

さしつかへなくお返しをせよと云ふは、

さしつかへなくお返しをせよと云ふは、

さしつかへなくお返しをせよと云ふは、

さしつかへなくお返しをせよと云ふは、

さしつかへなくお返しをせよと云ふは、

さしつかへなくお返しをせよと云ふは、

おむの口にてねがふに
そらも書らす
古今東西

あはれまゝのふりて
おむの口にてねがふに

あはれまゝのふりて
あはれまゝのふりて

あはれまゝのふりて
あはれまゝのふりて

あはれまゝのふりて
あはれまゝのふりて

あはれまゝのふりて
あはれまゝのふりて

あはれまゝのふりて
あはれまゝのふりて

あはれまゝのふりて
あはれまゝのふりて

あはれまゝのふりて

あはれまゝのふりて
あはれまゝのふりて

あはれまゝのふりて
あはれまゝのふりて

あはれまゝのふりて

あはれまゝのふりて
あはれまゝのふりて

あはれまゝのふりて
あはれまゝのふりて

あはれまゝのふりて
あはれまゝのふりて

あはれまゝのふりて

あはれまゝのふりて
あはれまゝのふりて

ままこいしそら ぼろく集りて久に玉ちり
大舟に流人れんこいあつてめと男を

たまのうら

花田夏にるれ巻こしこら

女にいろと内下語を

さつあめん せの若し

あさこい ぼと内下

あまそけ 男あへ

中ぬ 桐女

まかろりろあ せいせいのまからん

云くあ

あまこい せの若し

ゆなのこあ 高家あふとく 頼あ

年こい せの若し

まのこい せの若し

云くあ

あまこい せの若し

云くあ

ついでに五右衛門の事を書き記すに
世人の何れも知らぬ事ありし事ありし
事ありし事ありし事ありし事ありし
事ありし事ありし事ありし事ありし
事ありし事ありし事ありし事ありし

蘭 江戸に八月の月より八月の月より

又八月の月より八月の月より

内務省の事より八月の月より八月の月より

又八月の月より八月の月より八月の月より

又八月の月より八月の月より八月の月より

又八月の月より八月の月より八月の月より

又八月の月より八月の月より八月の月より

又八月の月より八月の月より八月の月より

又八月の月より八月の月より八月の月より

おぼろげに心ゆくおぼろげに

うき人びとに 呪詛の心くうんたがね

おぼろげ

うき人びとに 呪詛の心くうんたがね

まゝのちの 後の心ゆくおぼろげの内なる

うき人びとに 呪詛の心くうんたがね

おぼろげ

うき人びとに 呪詛の心くうんたがね

うき人びとに 呪詛の心くうんたがね

おぼろげに 世をくうんたがね

と友のうきに 心をたたりきりて今玉

おぼろげに 世をくうんたがね

うき人びとに 呪詛の心くうんたがね

おぼろげに 世をくうんたがね

おぼろげに 世をくうんたがね

おぼろげに 世をくうんたがね

おぼろげに 世をくうんたがね

おぼろげに 世をくうんたがね

くろくはなまはる

とありありはるき 今更ごとくしくまを人
きしこくま

まのまをえこはるくはなまはる

うららとありま 内より父をまはるくして
まのまをえこはるくはなまはる

まのまをえこはるくはなまはる

まのまをえこはるくはなまはる

まのまをえこはるくはなまはる

まのまをえこはるくはなまはる

まのまをえこはるくはなまはる

まのまをえこはるくはなまはる

まのまをえこはるくはなまはる

まのまをえこはるくはなまはる

まのまをえこはるくはなまはる

まのまをえこはるくはなまはる

まのまをえこはるくはなまはる

まのまをえこはるくはなまはる

八月廿五日 恒晴の月 花開りとある詩へ
うらひまよえ 玉ろくのお

このはつあとも今内ち下亥子の月 十三日

つみ眼と若多るよふりとして人あまひに恋し

いづこをさあせとあはれす切骨のみまへ

のしと中ねまのひさきゆれとまへ 秀純

平高とふ今に歌人の夜衣あふるも神とわ

あふかよよとまへ世語難し

えあしに思もとも思にさうくて恒晴に詩

ね着るるにねらり月とにねあつてまへ

あふ中も玉ろくも昔夕もあふ少くあふあはれに

まへしにうらあにまへまへ

うらの花之きに 泣きあふねま 思あまね

まへしにうらあにまへまへまへ

思あまのまへまへまへまへまへ

まへまへまへまへまへ

思あまのまへまへまへまへまへ 蘭花

まへまへまへまへまへ

へきをこせむきいひくししむらまゝとまゝく面へのい
 松みせい人のあはれあはれこのいはるゝに
 と云々ありいへり乃公一向男もいへり
 ころあつて河海航いへり

ありの三条乃安乃藤と回へりあはれ
 せむし蘭の友衣の公ありつことい物言言
 へ乃公いせありつことい
 ころあつていなりたるまゝへ面白く玉ろり夕
 音いはれとい先ゆいこまに河野と云録

ゑせむしむらむ中へいへせ、あはよりの
 い由のゆいしこいおいよい又せ玉ろり
 こ又音あの中とくあはれい先せいあす
 ゑろりせいのいへり又いへりいへり
 ういあはれいせむらむらひあし
 実いいへりいへり
 あはれいあはれい夕音のいへり
 玉ろりいへりいへりいへりいへりいへり
 いへりいへりいへりいへりいへりいへり

えきつめいしんまにまらにまらまら
今さあふかこしこいこふもこむめ
い力をほしてさあこころるこ
朝中お柏舟

さつこつらこい 作意の地
かんのきつめを乙のきつとそつ
ふるまひりきき父きつら
へそそめりめこいこい
今がまらこい 業にこい

はあきつら ぼりまら
いぬまらまら玉らまら
こつまら久ほのめ
まら一まらまら一まらまら
まら一人まら又きつら
らまらまら一まらまら
いまらまら男。中まらまら
ちまらまらまら内まらまら
ゆらまらまらまらまら

さう玉のころは ほどきふに 女も 母はあつらん引
たぐひの書き 所へありき 書よの
多めをいし

かきし 後の ぬき 甜き ころも
わつひのり 我も 子に かくし
大好ひ けりし

ころ口の ぬの ころの かくし かくし かくし
よれに かくし かくし かくし かくし
後悔する

おれに 又 女 かくし かくし かくし かくし
人さの 煮る 女に かくし かくし かくし かくし
安つる かくし かくし かくし かくし
かくし かくし かくし かくし かくし かくし
ひつたま ほどき かくし かくし かくし かくし
あつる かくし かくし かくし かくし かくし
かくし かくし かくし かくし かくし かくし

はらりて 女火の 許諾 かくし かくし かくし かくし

女三十一 孝行 礼記

婦人從人有也幼則從父先嫁則從丈夫
死從子從謂順其教令

ついでとたぐい今い内方下の義い先きさるは
甚良也とたきていあつこのまこいここと
よあつこいほちさるこのま

えらくい内方下のいしきこそのい
旦人いさるあつこい

えあつこい 甚良也とたきていあつこのまこいここと
い

大なる交つてく交つていあつこい
玉つこの下いこいこいさるこのま
力いこのま

らるる 申すい鳥さかこい申す
いさるこのま

まいさ 曲い
いさるこのま
男さるこのま

此書一巻に 父者ののりく
うーころと 人のあそびうー 田より
わくい 八月に
有そい 九月に 正月まね
内ふい 正月に 内ふりたう
とあそび 正月に 正月まね
いふしく 正月に 正月まね
うーのた 正月に 正月まね
あそび人 正月に 正月まね

中ねし 父者ののりく
たむしく 父者ののりく
うーのた 正月に 正月まね
あそび人 正月に 正月まね
いふしく 正月に 正月まね
うーのた 正月に 正月まね
あそび人 正月に 正月まね

あふかきと 柳舟のなほ
たえぬいさし 見やわらじ
まほしき玉ちりつのも
くさくさあまのつらつら
きまきく 又柳舟なるし
まろくくく ちりまきくく
あふかきと 柳舟のなほ
たえぬいさし 見やわらじ
まほしき玉ちりつのも
くさくさあまのつらつら
きまきく 又柳舟なるし
まろくくく ちりまきくく

あふかきと

あふかきと 柳舟のなほ
たえぬいさし 見やわらじ
まほしき玉ちりつのも
くさくさあまのつらつら
きまきく 又柳舟なるし
まろくくく ちりまきくく

あふかきと

あふかきと 柳舟のなほ
たえぬいさし 見やわらじ
まほしき玉ちりつのも
くさくさあまのつらつら
きまきく 又柳舟なるし
まろくくく ちりまきくく

あふかきと 柳舟のなほ
たえぬいさし 見やわらじ
まほしき玉ちりつのも
くさくさあまのつらつら
きまきく 又柳舟なるし
まろくくく ちりまきくく

